

連載〈まつやま 人・彩時記〉 ③4

現代演劇の貢献者  
日本芸術院会員  
名優 井上 正夫

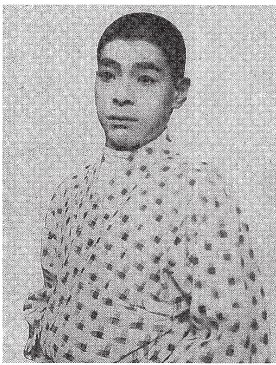
元四国郵政研修所長  
伊予史談会会員  
山崎 善啓

一、井上正夫略年譜

明治14・6	上浮穴郡大南村(現砥部町大南)に生まれる(本名 小坂勇一)	33	道頓堀・弁天座で上演の「当りの」で好評を得て、大部屋に昇進する
24 (11歳)	はじめて村芝居に出る	37・1	上京して、国華座の「残雪」に出演する
29	道頓堀の角座で新演劇成美団上演の「百万円」を観る	37	七、八月頃から幹部待遇を受ける。この頃「正夫」に改める
31・5	松山新栄座に興行中の敷島義団に入り、小坂幸二の芸名で初舞台を踏む	43・11	新時代劇協会を結成し、主宰する
	大成団に入団し、井上政夫と改名する	45	井上一座、砥部の大宮八幡神社で上演
		大正2・5	松山新栄座で上演。十二日間満員の盛況で、砥部村では玄米二十俵



井上 正夫



宿願に燃えていたころの井上

3・6	を寄贈する	9・4	国際活動映画株式会社に入社する。五月、映画研究視察のため渡米し、十一月帰国
4・9	新富座の新派大興行以後は、大幹部の待遇を受ける	10	十年、十一年、映画数本に出演
7・11	連鎖劇によって大衆興行に出る	12・8	演劇映画研究視察のため渡欧し、英仏独を巡る
8・5	舞台劇に復帰し、新派劇団を結成する	14・7	水谷八重子と「大尉の娘」を放送。NHK最初のメロドラマ
9・4	第一回国民文芸会賞を授与される	昭和2・11	砥部小学校へ「噫無情」の映画フィルムを寄贈
		11・4	井上演劇道場を開設し、後進の指導養成に専念する
		20・11	戦災者慰問のため、愛媛県下を巡演する。砥部で二日間開演する

二、生い立ち

21・1 井上演劇道場を解散し、新協劇団に入る  
24・4 日本芸術院会員となる  
25・1 新橋演舞場の新派大合同で「恋文」に出演。  
最後の舞台となる  
25・2・7 湯河原で急逝

三、演劇との出会い、旅役者の時代

明治三十一年五月、松山の新栄座に興行中の「新演劇敷島義団」の、風にはためく幟を見て、大阪で観た「百万円」の舞台を思い出していた。「そうだ、新演劇の役者になろう」と決意した正夫は、いきなり楽屋を訪ねた。そこで入

団し、小坂幸一と名乗り、初舞台に出た。

それからの弟子修行は随分つらい日々であった。いわゆる旅役者の下廻りとして、主として九州各地を巡業した。その間非常に芸熱心で、先輩の芸を身につけると共に、独自の演技をひたすら研究した。その後、大成団に入り、井上政夫と改名した。

明治三十三年、二十歳の時、神戸大黒座に出演し、これが中央劇団に入るきっかけとなる。この年、道頓堀の弁天座で上演の「当りの」の書生役が好評で、大部屋に昇進した。井上はますます芸を磨き、より新しいものを求めて努力してやまなかった。

## 四、東京へ

大部屋に昇進したといっても、所詮二流劇団である。一日も早く一流劇団の舞台で活躍したいと思っていた。『東京へ行きたい』、東京で思う存分腕を磨きたい』と、日夜東京を憧れるようになっていった。

明治三十七年一月、上京の機会を迎えた。国華座の藤沢一座に加わり「残雪」に出演した。その後、真砂座に移り、日露戦争の影響を受けて戦争芝居が流行し大入りが続いた。七月頃より幹部の待遇を受け、「正夫」と改めた。



明治44年(31歳)上演の「ベルス」

## 五、演劇一筋

明治四十三年には、新時代劇協会を主宰した。有楽座で四十四年まで三回上演し、その後協会を解散した。

四十五年、正夫は久しぶりに帰郷し、演劇を村の人々に見せたいと思立った。大宮八幡神社で「真の鏡」、「女天下」を上演し、郷土の人々を喜ばせた。

さらに、大正二年、松山に巡業することにした。高浜虚子は正夫の郷土入りに花を添えるべく、松山の海南新聞に次の推薦文を送った。

「五月五日から当地で開演する井上正夫君を紹介します。井上君は伊予が誇る文芸家の一人であります。井上君の故郷は砥部ですが、東京の新劇俳優中であつて第一人者であり、文芸家の仲間でも、世間一般にも尊敬されていることは私が申すまでもありません。井上君は都に十年苦悩をなめ、今度久しぶりに故郷へ錦を飾る晴れの舞台であります。後略(海南

## 新聞)

松山新栄座における開演は、十二日間、連日満員の盛況であった。砥部村では、同郷客への便宜を考へて、新栄座の近くに「砥部村有志観覧事務所」を設けた。劇場前には、砥部の有志から贈られた玄米二十俵が積み上げられていた。正夫は砥部の人々のあたたかい応援に目頭を熱くして感謝した。

一番町停留所の看板には「森松高浜線毎夜午後十二時まで臨時運転」とあり、芝居客殺到を配慮した伊予鉄の措置であつた。

## ●連鎖劇出演

新しいものに興味を持つ正夫は、大正四年、浅草御国座で連鎖劇によって大衆興行に乗り出した。連鎖劇とは、舞台劇の間に映画をはさんで見せるもので、舞台では充分効果の出し得ない乱闘の場面などを、初日の前にロケに行つて撮影していた。

正夫は、大正七年までの三年間、御国座と本郷座で連鎖劇の全盛時代をつくつた。新派からは反逆児



連鎖劇の絵本筋書本より

扱いされただれど、勤労大衆、若い学生層には絶大な支持をうけた。正夫が舞台上になると「日本一」と掛け声があり、「お前が出る

から観にくるんだぞ」と声援がとんだ。

大正四年から六年にかけて、全国の活動写真館は井上正夫一派出演のフィルムを上映した。

新しいものを求めてやまない正夫は、大正八年二月、従来通俗劇から一歩前進して、徳田秋声作「路傍の花」、久米正雄作「地蔵教由来」を明治座で上演した。五月には、さらに国木田独歩作「酒中日記」を上演し、これにより、第一回国民文芸会賞を授与された。

## 六、映画へ転向

大正九年に入り、正夫に一大転機が訪れた。東京に国際活動映画株式会社が生まれ、正夫に入社し映画を作らないかと声がかかった。四月に東京へ帰ると話がまとまり、映画入りすることになった。五月には、撮影所長とともに映画研究視察のため渡米し、十一月に帰国した。正夫の映画出演は、寒椿・海の人・海の呼声・噫無情・祖国など、十四年中までに十本ほどであった。そのうち「大地に微笑む」では、関西映画協会から表彰された。



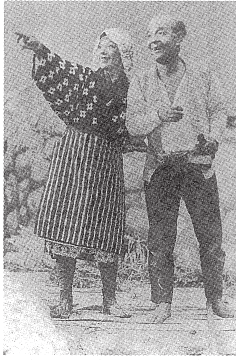
大正15年(46歳)出演。川端康成原作。衣笠貞之助監督「狂った一頁」

大正十四年三月、NHKが放送開始したが、同年七月、水谷八重子と「大尉の娘」を放送した。これが、NHK最初のメロドラマであったが、極めて好評であった。

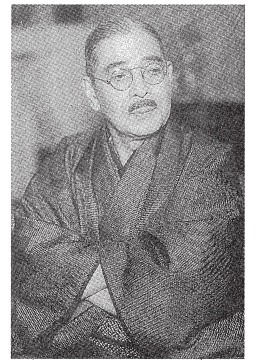
### 七、井上演劇道場開設

映画に演劇に、正夫の活躍はとどまるところを知らなかった。昭和十一年には、岡田嘉子らを一座に加えて井上演劇道場を開設し、後進の指導養成に専念する一方、各劇場で芸術的な大衆劇を上演し、商業演劇の向上を図った。これによって、有識者並びに新しい演劇観客層の大きな支持を得ることができた。主要な演目は次の通り。

- 四月 明治座で「人生劇場」、  
〔雲雀〕
- 六月 歌舞伎座で「断層」
- 八月 明治座で「彦六大いに笑う」
- 十一月 明治座で「熊の唄」
- 十二年二月 歌舞伎座で「真実一路」
- 四月 松山国伎座で「夫の貞操」
- 五月 明治座で「北東の風」
- 六月 東京劇場で「地熱」
- 七月 大阪歌舞伎座で「新世帯案内」
- 八月 東京劇場で「幸福の夢」
- 九月 明治座で「湖心荘」



「雲雀」(昭和11年)。  
共演・岡田嘉子



「真実一路」  
(昭和12年)

十一月 明治座で「華やかな夜景」  
なお、十三年には、大谷松竹社長が正夫のため、劇作家八木隆一に正夫の故郷・砥部の窯場を舞台にした作品「焰の人」を書かせた。砥部焼を舞台にしたこの劇は、正夫によって明治座で上演され、好評を博した。



(上) 焰の人(昭和13年)。(下) 井上演劇道場「発足」井上の左・岡田嘉子(昭和11年)

### 八、戦後の活躍

大平洋戦争で東京中の劇場は大半焼失した。戦災で家財を失った人、田舎へ疎開した人たち、みなみじめな生活をしてきた。戦争中に生まれた移動演劇連盟は、敗戦後の奉仕として、このような戦災者慰問の演劇隊を出す計画を立てた。この計画を聞いた正夫は道場を連れて参加することとし、十一月、愛媛県を巡演することとした。

年代	劇場	演目
21・2	新宿第一	幸福の家
4	邦楽座	栗並木の下で
11	新宿第一	恋文・男
22・5	新宿第一	海の星
6	東劇	華やかな夜景
	松竹大船	リラの花忘れ(映画)
	松竹大船	愛情十字路(映画)
11	新宿第一	恋文
23・4	東劇	大尉の娘
7	有楽座	鐘の鳴る丘
7	松竹	殺人鬼(映画)
8	松竹	わが生活の輝ける日(映画)
10	NHK	二十歳(放送)
12	東劇	金色夜叉
24・5	東劇	宮本武蔵
8	NHK	焰の人(放送)
8	新東宝	帰国(映画)
10	東劇	洛北の秋
12	NHK	高砂(放送)

十一月二十日、県戦災援護会の協力で、郡中町において戦災慰安演劇会を開催。二十七日には故郷の砥部座で昼夜二回上演。しかし砥部座はいくら詰めても五、六百人しか入らない芝居小屋である。これでは多くの人々の要望にこたえられないので、翌日は小学校の運動場に仮舞台をつくり上演した。正夫は、二十年暮れ、終戦を転機として新しい演劇人として再出発すべく、「井上演芸道場」という古めかしい看板は下ろし、一兵卒となつて新日本の演劇界に乗り出そうと決意し、二十一年一月、道場を解散し、新協劇団の公演に参加した。戦後の主な出演は次の通り。



「閣下」の井上正夫  
(昭和15年)



「大尉の娘」  
(昭和7年)。  
共演・水谷八重子

二十四年四月、正夫は六十九歳になった。この年、正夫は先輩の推薦を受けて、日本芸術院会員になった。推薦を受けた正夫は、「日本芸術院に入るなどということは、省みて余りにも、じくじたるものがある。だが私の故郷では、出身校に私の肖像が掲げられおり、郷土諸本にも出されている…そのことを図らずも思い出して、私は会員になることを決意した」と述べている。その年十月二十一日には、正夫は天皇陛下陪食の栄に浴した。

### 九、急逝

昭和二十五年一月、正夫は新橋演舞場の新派大合同で水谷八重子と共演の「恋文」に出演し、ついにこれが最後の舞台となった。二月七日、湯河原で心臓麻痺のため急逝した。行年七十歳。二月十五日、築地本願寺で盛大な文化葬が

営まれた。  
多年演劇に尽くした功績により、勲四等を贈られた。



井上正夫の碑

## 十、功績をたたえて

昭和二十六年十月、横浜日吉台旧邸内に全国有志の拠出金による「井上正夫之碑」が建てられた。

二十八年五月、松山市駅前には胸像が建てられた。高さ二メートルほどで、台石の正面には「井上正夫の像」とある。台石の裏側には「南無三宝七十歳にはやとなり正夫」と彫り込んである。これは、正夫が書いた文字をそのまま彫り込んだものである。

そのすぐ上に、ブルーの焼物の四角い陶板がはめ込んであり、次のように書かれてある。

その生涯は高き芸への追求であり、その資格は劇界の至宝であった。

ここにすべての芸術とこの人を讃えるために

一九五二年建立

本名 小坂勇一

(二八八〜一九五〇)

俳優 日本芸術院会員

芸能生活 五四年

## 故郷 郊外 砥部

三十一年二月には、新橋演舞場において、井上正夫七回忌追慕新派大合同公演が行われた。次いで三十七年二月にも、新橋演舞場において十三回忌追悼公演が行われた。

四十一年二月には、出身地の砥部町大南に、井上正夫墓碑が建ち、十七回忌追悼式が盛大に行われた。当日は、NHKテレビでこの模様を全国に放送され、東京のスタジオには、北条秀司、伊志井寛、市川翠扇、蜂野豊夫が、砥部町からは除幕式場より、弟の小坂起二郎父子らが参加した。

五十五年には、砥部町では「井上正夫生誕百年祭」記念事業を主催し、各種顕彰行事を開催した。以後、砥部町では井上正夫の遺徳をしのび、毎年二月七日の命日を如月忌(きさらぎ忌)として顕彰行事を催している。

## ◎追想

昭和五十五年発行の「井上正夫追憶集」には、九十人近い人々の思い出、追憶が掲載されている。その中から、七回忌に寄せた、当時の安倍能成学習院長の追想文を紹介して、井上正夫を偲ぶこととした。

『井上正夫さんの追想 安倍能成』

井上正夫君が私の郷里、伊予松山市から二里半ばかりの砥部村の人だということは、いつとなく聞

いて知っていたが、親しくお目にかかって話したのは、逝去前一年ぐらいかと思うが、新橋駅の食堂に、同郷の今代議士をしている菅野和太郎君など数人が私たちをよんでくれたときの一度きりだった。―中略―

新派劇の将来についてははつきりした見通しは持たぬけれども、私ときどきは見えて、高田実とか、花柳章太郎とかの芸には、引きつけられるものを感じていたが、やはり井上君は新派劇をつきぬけて、新劇という広い舞台で活躍できる人だと思っていたのに、そうして見たところ健康で長生きができると思像していたのに、意外に早く世を去られたのは、痛惜の至りである。

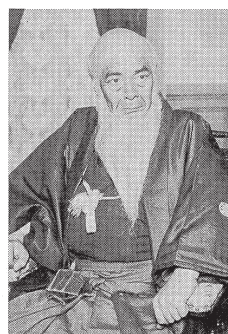
私は、劇の印象のはっきり残らぬたちで、井上君の舞台もどのくらい見たらうか、まず十くらいだったろう。記憶しているのは「大尉の娘」「富岡先生」「馬泥棒」。

井上君は天分もあるが、それよりも一層まじめな努力家であったと思う。おそらく水谷八重子が今日の芸にまで伸びたのも、井上君の刺激と啓発によるところが大いのではないかと思うが、どうであろう。「大尉の娘」の大尉だとか、富岡先生だとか、井上君は老役(ふけやく)においてことに評判がよく、また強い印象を与えた。その顔のつくりにも、扮装にも、またせりふや表情、動作にも随分

「噫無情(大正12年)。ジャンバルジャン・井上正夫



苦心と工夫があったように思えて、ひそかに敬意を表しておった。井上君には、あきらかに伊予のアクセントがあり、「ああそうですか」とい



「富岡先生」(昭和4年)。富岡先生・井上正夫



「犬家」(昭和7年)。畔田進(船長)・井上正夫。妻：弘子・花柳章太郎



「海鳴り」(昭和11年)。お民・井上正夫

うようなせりふは、私も上手にまねができる。同郷人たる私には、これもまたなつかしかった。かえすがえすも、惜しい役者を早く亡くした嘆きを禁じえない。』

## 【参考文献】

- 「化け損ねた狸」 井上正夫
- 「舞台大変」 上田雅一
- 「井上正夫遺墨集」 砥部町教育委員会
- 「井上正夫追憶集」 砥部町教育委員会